

プロジェクト

vol.34

文責：荒木 秀夫
(徳島大学大学院教授)

コーディネーション能力としての「分化能力」

これまでに定位能力について話を進めてきましたが、これと深く関係する「分化能力」について、いくつかのことに触れていくことにします。

「分化」という言葉は、そもそも医学や生物学では、細胞が分裂していろいろな細胞、組織へと分かれていくことを意味しますが、同時に何かに対して細かく反応するといったニュアンスでも使われます。要するに区別するといった感じになります。よく知られているのは、条件反射における分化です。最初にある刺激に対して学習すると、似たような刺激に対しても少しは間違っただけで反応してしまうのですが、何度も繰り返していくと次第に正確に反応するようになります。この過程を分化と呼んでいます。研ぎ澄まされた反応と

でもいえるでしょう。

これには、大変広い意味も狭い意味も含まれます。たとえば、正確にボールを的に当てるとい場合、きっちり判断して投げられるということでも、体の部分を上手に使い分けるといった意味でも使われます。小さな子どもは箸を手でギュッと握りしめますが、これは指一本一本を別々に使うことができないということでは「分化していない」ということになるでしょう。つまり、体の部分などを必要に応じて使い分ける能力が分化能力であるということになります。

それでは、この分化能力はいったいどうやって獲得していくのでしょうか。もちろん学習によってではありますが、大切なことは学習する前の段階、つまり分化していない状態が大変重要な意味があるということです。

これがコーディネーション能力としての「分化能力」の最大の特徴ともいえます。簡単にいえば、完全に分化できたとしても、実は、分化される前の状態は、脳と体の中に残されていて、それは分化された運動をより発展的に応用できるといことを助けることになるからです。

問合せ先／スポーツ推進課プロ
ジェクトK・スポーツ推進係
☎57・4850



乳児シリーズ vol.5

「意図」の理解から言葉の理解へ

赤ちゃんのコミュニケーションの始まり…これが前回のテーマでした。お気づきの方もおられたかと思いますが、「言語・言葉」の話には触れていませんでした。それなのに、なぜ「コミュニケーションの始まり」なのか。

実は、赤ちゃんのコミュニケーション能力は、決して言葉そのものから始まるのではなく、「もの」の認知から始まります。スプーンを持っている人の顔を見て、その性質、特徴を理解する、しかもその人の顔を見比べて、「意図」を読み取るというのが今回の話題でした。意図を読み取るというのはスプーンを持っている人が何をしようとしているのか、自分にとってどんな意味があるのかを「言葉なき言葉」で理解しようとするのです。

ある一定の時期になるまでは、テーブルの上においてあるスプーンには反応しません。誰かがそれを持って目の前で見せることによって、意図を探り、「言葉」につながるイメージがつけられます。単語は、「もの(スプーンという物体)」と「言葉(スプーンという言葉)」が単

純につながるものではありません。意味づけ、意図が間に入って、強く深く単語を理解することになります。赤ちゃんは、一つ一つの単語から覚えていくといわれていますが、単語の羅列ではない意味ある文としての文脈的なセンスも学んでいくことになります。それがオウムと人間との違いです。

赤ちゃんに二つのスプーンを見せると、比較ができます。違っているけど何かが共通している…といった漠然としたことを理解しようとし、片方を渡されれば、より二つの「違い」を意識するでしょう。平等に存在していた二つのスプーンが、自分に関わるのと関わらないスプーンに分かれ、「もの」の理解に時間の流れが加わるようになるわけです。この時間の流れは、「何が、どうなっていく」といった文脈の原型となります。

これが「コミュニケーション・コーディネーション」の始まりとなります。

